



早石修記念海外留学助成による留学体験記

2022年度年度採択者 三木 健嗣

私は2019年9月から2023年3月までマサチューセッツ総合病院 (Massachusetts General Hospital : MGH) のOtt研究室に留学し、本留学助成金は2022年4月から2023年3月まで支援いただきました。留学して数年が経過した中でも日本国内の留学助成金へ申請できる財団はほとんどなく、私にとって最後の1年間の本助成金はまさに干天の慈雨でありました。改めて、大変貴重な機会を与えてくださった財団関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

MGHはハーバード大学関連病院の一つで、世界各国から医師だけでなく様々なバックグラウンドを持つ研究者が集う研究機関であり、かつMGHの近郊にはハーバード大学だけでなくマサチューセッツ工科大学など屈指の研究機関もあり、研究を実施する上でこれほど充実した地区は他にないと思います。私の所属していたOtt研究室は、MGHメインキャンパスからBlossom streetを隔てた向かい側にあるThe Richard B. Simches Research Center内の4階にあり、我々の研究室以外にも多くの著名な研究室が多数同じフロアで切磋琢磨している環境でした。Center 1階の横にはWhole Foods Marketがあり、よく昼食を買って食べたのもいい思い出です (クラムチャウダーはかなり美味しいです)。

研究に関しては、私は修士課程、博士課程、ポスドク、特定助教と日本国内で経験し、iPS細胞から心筋細胞への分化誘導、心筋細胞の精製方法、成熟化法に関する研究をしていました。そのような中、以前からより機能的な三次元心筋組織の構築をしたいと考えていたところ、心臓の脱細胞化・再細胞化のパイオニアであるOtt先生と話す機会をいただき、リサーチフェローとして受け入れていただきました。Ott先生はThoracic SurgeonとしてMGHで執刀する一方、基礎研究のラボを運営し、かつご自身のベンチャー企業もマネージするいわゆるスーパーマン的先生で、ミーティングでもいつもユーモアを交えながら真面目なサイエンスのディスカッションもできる非常に稀有な先生だと思います。Ott研究室での詳細な研究内容はここでは省略しますが、脱細胞化技術だけでなく3Dプリンターの技術など新たな技術を習得でき、これからの研究人生の新たな基盤を構築できたことは、留学の機会をいただいたOtt先生に感謝しております。また、研究室メンバー以外にも留学期間に多くの研究者と知り合えたことは本当にありがたいことで、私自身の分野以外の多くの研究者とも話す機会がたくさんあり、非常に刺激的な毎日を過ごすことができたのは周りの方々のおかげだと心からそう思います。また、ボストンや日本で彼ら彼女らと再会する日を楽

しみにしております。

私生活においては、今回の留学には妻と当時5歳と2歳半の二人の娘と一緒に渡米しました。娘達は全く英語が話せない状況でいきなりアメリカのpreschoolに入れられ、当時は非常に可哀想なことをしたと思っておりましたが、彼女達の柔軟さ、吸収の早さに日々驚かされる毎日でした。長女はkindergartenそしてelementary schoolと進み、次女はkindergartenの途中で帰国となりましたが、二人とも多様な人種の子供達と一緒に学ぶことができ、多くの友人ができたことは私としても非常に誇らしく羨ましくもありました。ですが、一番頼もしい存在は妻でした。渡米時は日本の会社を休職してついてきてくれましたが、渡米後毎日ライブラリーやチャーチの英語のクラスを受講し、空いた時間は単語の勉強をしたりと、もともとある程度英語を話せるレベルではありましたが、いつの間にかネイティブの知り合いともスラスラと会話しておりました。そして、渡米して約2年半がすぎた頃には米国の製薬企業へ転職が決まり、私自身留学期間において、いい意味で最も驚いたことだったと思います。家事をしながら子どもの送り迎えをし、自身のキャリアアップも成し遂げている妻には本当に頭が下がり感謝しかありません。

最後に、私自身のキャリアパスについてお伝えできればと思います。私はありがたいことに当時の指導教官の先生方からの勧めで、上述のように学位取得後約7年間を日本で研究する機会を得ておりました。おそらくこのようなケースでの留学は稀だと思います。留学するのに最も一般的な学振の海外特別研究員への応募資格は喪失しており、35歳未満しか応募できない留学助成金もある中、大学院時代から留学したいという気持ちはあり、おそらくこの時期 (当時35歳) が最後だという思いで留学を決めました。当時は特定助教というポストについており、リサーチフェローでの留学には反対の声も多数いただき、日本に帰国できる保証も全くない中、正直将来の不安がなかったわけではありません。ですが今は、間違いなく留学して良かったと心から言えます。家族だけでなく留学先で知り合った多くの方々を支えられたからに他なりません。もしこの寄稿をお読みくださった方々の中に留学を迷われている方がいましたら、是非一歩踏み出していただければと思います。いろんな失敗も含め人生を豊かにしてくれることは間違いなくと思います。本財団の助成の応募資格はまさに先駆的であり、学位取得後の年数も幅広く、また留学後も申請できる本財団のような助成が増えることを心より願っております。私が留学を通して経験してきたことをこ

の場でお伝えしきれないのが残念ではありますが、もし何かお役に立てることがありましたら財団やresearchmapの連絡先などを通してご一報いただければ幸いです。最後まで

でお付き合いいただきありがとうございました。

(現 大阪大学ヒューマン・メタバース疾患研究拠点
特任講師 (常勤))